

第24回冬大会個人研究発表まとめ

画像における情動表出の多様性

村山 正碩（一橋大学社会学研究科）

本発表は、絵や写真といった画像が目には見えない心的状態（とりわけ情動）を表出するという現象、すなわち画像表出を扱うものであった。ここでは発表の概要と質疑応答をまとめる。

ドミニク・ロペスが指摘するように、画像表出に関する二つの問い、〈画像表出とは何か〉と〈画像表出のメカニズムとは何か〉は切り離すことができる。本発表は前者を作業仮説の提示で済ませ、後者に焦点を絞って議論した。画像表出のメカニズムを探求する際に問題となるのはその雑多性であり、これは一般的な仕方で理論化する試みを阻む。しかし、少なくとも二つの顕著な方向性が存在し、広く確認されるメカニズムはそのどちらかに位置づけられる。第一に、表出的ふるまいとの関係を利用するものがある。具体的には、画像は情動Eの表出的ふるまいを①模倣したり、②その痕跡の現れを所有することで、Eを表出できる。第二に、情動経験との関係を利用するものがある。具体的には、画像は③Eにともなう身体感覚との経験の合同の利用をしたり、④Eの影響を被った視点から見られた世界を描写したりすることで、Eを表出できる。そして、これら四つのメカニズムのあり方を、豊富な事例を示すとともに明確化した。最後に、画像表出は雑多な現象だが、どれも共通の四つのパラメータをもつことを指摘し、事例の分析に役立つ一般的な枠組みを提案した。

会場では多くの有意義な質問やコメントが寄せられたが、とりわけ注目に値する二つの論点をここで取り上げたい。第一に、画像表出の価値に関する問題がある。画像表出が正の価値をもつとすれば、それは画像表出がもつ情動喚起の力に由来するのか。情動喚起とは、ゴヤの『我が子を食らうサトゥルヌス』を見て鑑賞者が戦慄を覚えるように、鑑賞者に情動的反応を引き起こすことである。もちろん、まさに情動を喚起するために価値をもつ事例もあるが、それに尽くされるかどうかは疑問が残ると回答した。たとえば、非常に精妙に達成された表出は、それがいかに生じたか、つまりメカニズムに注意を向けること自体が一つの美的経験であり、ゆえに価値をもつかもしいない。

第二に、合同説に関する問題がある。合同説はミッチェル・グリーンが支持している一種の表出のメカニズムの説明であり、上記の③に相当する。画像表出の場合、これは色や光景による表出などの説明に適している。なぜ黄色は陽気で、ムンクの『叫び』に描かれたうねるような空は不安感を表出するのか。合同説によれば、それらを見る経験と表出された情動にともなう身体感覚の経験とが合同、つまり様相横断的な評価次元に

2019年5月15日発行

において一致しているためである。これに対して、具体的にどんな様相横断的な評価次元が、いくつか存在するのかが問われた。グリーンは〈快／不快〉、〈強烈／穏やか〉、〈動的／静的〉という三つの評価次元をあらゆる感覚様相に共通するものとして挙げているが、これは暫定的な候補でしかない。結局のところ、様相横断的な評価次元が具体的にどんなものであり、いくつ存在するかは経験的研究の課題であって、哲学的研究の守備範囲からは外れるのだ。その点で、合同説はさらなる経験的研究を要求する一つの仮説に過ぎないが、その説明力の高さから、容易に手放すわけにはいかないと思われる。